

## アジア・太平洋研究センター主催, 外国語学部アジア学科共催講演会

日 時：2024年2月20日（火）

場 所：南山大学 E棟1階E12教室

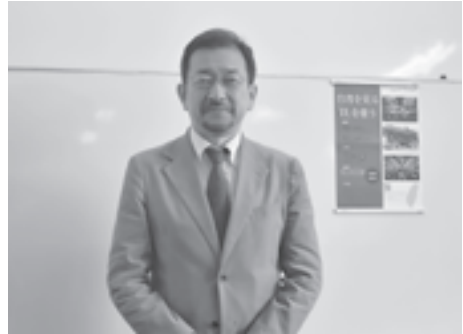
テーマ：台湾を見る「目」を養う

報告者：若松 大祐（常葉大学外国語学部准教授）

村上 太輝夫（朝日新聞論説委員）



若松 大祐氏



村上 太輝夫氏

新型コロナウイルス感染拡大にともなう厳重な渡航制限で知られる台湾は、2022年9月に日本人のビザ免除措置を再開し、その後も徐々に制限を緩和した。日本から台湾への観光・留学が容易になり、南山大学アジア学科は2020年以降中断していた台湾実習を2024年3月に実施することとなった。このように、いわゆるコロナ禍の状況下ではオンラインツールなどを通じて間接的にしかアプローチできなかった台湾に対し、日本人はみずから渡航して現地の文化や社会に直接触れることができるようになったのである。

それでは、日本人が台湾について学ぶ意義とは何か？日本人は台湾のどのような点に着目すればよいのか？本講演会では、若松大祐氏が地域研究としての台湾について、村上太輝夫氏が2024年1月の総統選挙・立法委員選挙についてそれぞれ講演し、その後、来場者との質疑応答を交えて総合討論を行った。

### 日本から台湾を見ること

若松 大祐

はじめに

台湾を見るために唯一の正しい目というものが、果たして存在するのか。本発表で

は、まず外国を研究する理由について確認する。次に、日本から一般的に見えやすい台湾の姿に触れる。そして、日本から一般的に見えにくい台湾の姿に、話題を及ぼす。最後に、台湾を見るためにふさわしい目とは、課題に即した目なのであると指摘したい。

## 一、地域研究

地球上では様々な課題（問題）が発生している。地球全体に関する課題を解決しようと試みるのが国際関係論（International Relations）であり、特定の地域に特有の課題を解決しようと試みるのが地域研究（Area Studies）である。

例えば、カナダで1960-1970年代に水銀汚染が発生した際、被害者と加害者の双方が期せずして同様に日本の水俣病（1950年代から）を調査し、裁判に臨んだという（「座談会 研究室からフィールドへ」、『地域研究：JCAS review』Vol.7 No.1, 2005年6月, pp.13-46）。公害は地球的な課題であり、また地域的な課題である。課題を解決するためには、文系理系を問わず、政治、経済、歴史、文化、生態、化学などの学問（discipline）を駆使しなければならない。何よりも外国語を使えないと、関係者と議論できず、関係資料を読めないから、課題解決にいたらない。（南山大学の外国語学部が「The Faculty of Foreign Studies」であり、「The Faculty of Foreign Languages」でないのは、外国語を使って外国を研究するという趣旨に基づくからであろう。）

やがて地域研究は課題に即し、地域というものの範囲を特定して切り取り、その地域の独自性を徹底的に調べるようになる。したがって、地域研究は人間が自らの主観に基づき選び取った地域の「らしさ」を、論理的に説明しようと試みる学問なのである。

## 二、日本から見えやすい台湾と見えにくい台湾

このたび我々は、台湾という地域に注目する。拙編著『台湾を知るための72章』（明石書店、2022年）は、歴史、政治、経済、社会、文化、対外関係、人物を踏まえ、「台湾らしさ」を説明する試みである。拙編著の内容からもわかるように、日本から見えやすい台湾と見えにくい台湾がある。

見えやすい台湾を時系列的に挙げるならば、(1)台湾原住民、(2)日本の外地（1895-1945年）、(3)唯一合法の中国（1945-1972年）、(4)実務関係（1972年-現在）、(5)日台友情（311東日本大震災、コロナウイルス感染症）、グルメ、台湾有事であろう。専門的またはマニアックなものとして、鮪、温泉、地震、わさび、洗骨（撿骨）、亀甲墓、シーサー（風獅爺）、石敢当も挙がろう。

対して、見えにくい台湾がある。例えば、バチカンと国交を結び、台湾ではカト

リックが少ないながらも存在感を放つ。大洋州の3ヶ国、ラテンアメリカの7ヶ国、アフリカの1ヶ国と国交を結ぶ。いずれの国も中華民国と国交を結んでいるのであり、台湾と国交を結ぶ国は世界中に一つもない。台湾は華僑を通じ、東南アジア諸国と強く結びつき、「アジアの孤児」といえば、呉濁流ではなく、羅大祐を多くの人々は連想するほどである。とりわけ見えにくいのは、「台湾≡中華民国」という命題だろう。現実的 (de facto) には「台湾=国家」であり、理論的 (de jure) には「台湾≠国家」であるという現状維持 (Maintaining the Status Quo) (『アジア・マップ』1, TW.1.01, ([https://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/asia\\_map\\_vol01/taiwan/country/](https://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/asia_map_vol01/taiwan/country/))) は、なかなか理解しづらい。

以上の見えやすい台湾と見えにくい台湾は、「台湾は国家なのか」という発表者の疑問 (課題) に即したものである。例えば台湾島は多様な生態系であり、台湾には非常に多くの種類の蝶が棲む (「知られざる「チョウ大国」」(<https://www.nippon.com/ja/column/g00438/>))。蝶を研究する人には、発表者と異なる台湾が見えてくるはずである。

おわりに

台湾を見るために唯一の正しい目というものは存在しないし、そもそも見る「目」はいずれも主観的である。我々は自身の課題 (疑問) に即し、台湾を見る。そのためには、常に自らの課題を批判 (吟味検討) し、見る「目」を学際的 (Interdisciplinary) に養わなければならない。

### 注目すべき台湾の選挙結果

村上 太輝夫

台湾では今年1月13日に総統選、立法院 (国会) 選が投開票された。現政権を担う民進党が総統選で勝利したものの、立法院は議席を減らして過半数割れとなった。

民主化後の台湾政治史において、今回の選挙には特筆すべき点がある。まず、民進党が「8年の呪い」を破ったことだ。

1996年に初めて総統の直接選挙が実施されて国民党の李登輝氏が当選、その4年後に引退すると、2000年からは民進党 (陳水扁氏) が2期8年、08年からは国民党 (馬英九氏) が2期8年、そして16年からは民進党 (蔡英文氏) が2期8年という具合に8年ごとの政権交代が起きた。一政党が8年間政権を担当すると、政策の失敗、あるいは汚職などの不祥事が出てきて交代のムードが高まるものだ。まして、国民党の独裁政治をくぐり抜けた台湾社会は長期政権への警戒感が根強く、選挙前には6割

超が政権交代を望むと答えた世論調査結果もある。これが台湾社会で「8年の呪い」と呼ばれたのだった。

にもかかわらず民進党が勝ち、さらに4年間の政権担当を確保した。言い換えれば政権奪還への絶好の機会を国民党は逃した。この2大政党はいずれも得票率は高いとは言えず、民進党が40%、国民党は33%だった。

残る26%を得たのが新興勢力の民衆党で、これがもう一つの注目点だ。前台北市長で今回の総統候補だった柯文哲氏が2019年に設立した新しい党が、これほど高い得票率を記録したのは驚くべきことと言っていい。選挙集会では多くの若者の熱気が感じられた。選挙前のある世論調査では、20代の支持率が52%に達した。ところが60代以上だとわずか3%しかない。このような極端な支持構造を持つ政党は珍しいのではないか。

若者はなぜ民衆党を支持するのか。集会で取材をすると、口にするのは雇用と不動産の問題（いい就職先がない、家賃が高い）だ。この8年の民進党政権でうまく解決できなかった問題であり、民衆党が不満の受け皿になった。立法院選では民衆党は候補者を十分に揃えることができず、8議席にとどまったのだが、これもまた重みを持つ。2大政党とも113議席の過半数に届かず、民衆党の動き方で法案や予算成立の可否が決まるためだ。4年後の次期選挙に向けて組織を拡大できるかという点を含めて、しばらく目が離せない。

台湾では、政治の世界で女性の活躍は当たり前になっている。現総統が女性であり、新副総統も女性である。立法委員では今回の当選者のうち女性が42%を占める。立法院選の比例代表部分（34議席）の半数を女性に割り当てるクオータ制があり、加えて各政党が女性候補を積極的に登用しているためだ。

地方政治に目を転ずれば、22県市長のうち9人が女性、地方議員は37.5%が女性だ。台湾は民主政治の歴史がまだ浅いが、少なくとも女性進出という点だけでも、すでに日本の先を行く。私たちが台湾から学び取るべきことは多いと思われる。

（文責：宮原 佳昭）